

べきは曰ふ迄も無し、舊唐書に「退保烏德健山」とし、新唐書に「久之奔突厥死」と記せば、此の後護輸が唐を去りて漠北に歸還したりしことは疑ふ可らざれど、其の間兩者の關係の如何なりしかは知る可らず、思ふに當時は吐蕃の勢隆盛にして、頻年河西隴右の地を侵し、唐を惱ましたる時にして、此の事件の起りし開元十五年の九月にも、其の大將悉諾邏恭祿は瓜州を陥れ、刺史田元獻及び王君奐の父を虜にし、別將莽布支は常樂縣を圍みたるものなれば、王君奐を殺し、唐と敵となるに至りし回鶻以下の鐵勒部が、君奐傳に見ゆるが如く吐蕃に走り、其の勢力と結ぶに至るべきは、自然の勢と見ざる可らず、されば此の後何時に於て突厥に走るに至りしかは明かならざれども、其の時に至る迄は吐蕃に附したるものと見るを以て當れりとすべし。

第 二 期

第一章 骨力裴羅 (骨咄祿毗伽闕懷仁可汗) の時代

新唐書回鶻傳に據れば、護輸が突厥に走りて死するや其の子骨力裴羅立てりと記さる、裴羅が何年に立ちしかは明かならざれども、天寶元年には既に使を遣して入貢したること、次に述ぶるが如くなれば、思ふに其の父の後を襲ひしは、開元中の事なるや疑無し。

骨力裴羅の名は唐會要舊唐書等には之を載せざれども、其の唐より奉義王に封ぜられ、又自ら骨咄祿毗伽闕可汗と稱し、更に唐より懷仁可汗に冊せられしことを始め、其の他の事績は皆舊唐書及び冊府元龜に見ゆる葉護頡利